

日本語可能文における実現含意と格標示制約*

小 林 亜希子

1. 可能文の格フレームと非過去のタ

可能文とは、行為者がある事態 X を実現する能力を有していること、または X が実現する必要条件がそろっていることを表す構文である。日本語可能文の述語は、動詞の語幹に可能の助動詞-(rar)eru を付けて派生される可能動詞である¹。語幹が子音で終わる動詞（五段活用動詞）には-eru, 母音で終わる動詞（上一段・下一段活用動詞）には-rareru（地域、世代によっては-reru）が付く。

- (1) a. 話す (hanas-u) → 話せる (hanas-eru)
b. 着る (ki-ru) → 着られる (ki-rareru)/着れる (ki-reru)

よく知られていることであるが、可能文の目的語を標示する格は、ヲ、がいずれでもよい。

- (2) a. 太郎は フランス語を 話せる。 [ヲ可能]
b. 太郎は フランス語が 話せる。 [ガ可能]

可能文が過去時制で用いられた場合も同様、2とおりの格標示が容認される。

* 本稿は、第 285 回広島言語文化談話会（2009 年 8 月 1 日、於：広島大学西条キャンパス）で発表した内容を修正・発展させたものである。有益なコメントと指摘を下されたオーディエンスの方々に感謝したい。また、インフォーマント調査にご協力下さった吉川史子氏・Scott Menking 氏・大島カレン氏にもお礼を申し上げる。言うまでもなく、本稿におけるいかなる不備もその責任は筆者一人にある。

¹ サ変動詞（e.g.「容認する」）は上記の方法ではなく、「スル」を除いた名詞述語に「デキル」を付けて可能動詞形を派生する（e.g.「容認できる」）。本稿の議論はサ変動詞の可能文にもあてはまるが、データの種類を統一する便宜から、サ変動詞は扱わない。

(3) 太郎は 子どものころ フランス語 |を/が| 話せた。

ただし、2つの格標示は常に容認されるわけではなく、述語の意味タイプや情報構造などによっては一方しか容認されない（または使用頻度が偏る）こともあることが知られている²。

そのような制約の一つとして、本稿はまず、これまで気づかれてこなかった事実を指摘する。次の例を見てみよう。

(4) a. (仏字新聞を読む人を見て)

へえ、君は フランス語 |*を/が| 読めたんだ。

b. (太郎が飲む姿を見て) 太郎は ウイスキー |*を/が| 飲めたのか。

「君がフランス語を読めること」「太郎がウイスキーを飲めること」は発話時に成立する可能性であるので、(4 a, b) に現れる「タ」は明らかに「過去のタ」ではない。このような非過去のタを寺村 (1984) は「叙想的テンスのタ」と呼び、ムード表現の一つであるとしている。2.1 節で述べるように、「ムードのタ」にはいろいろな用法があるが、(4 a, b) の「タ」は「発見のタ」と呼ばれるものである。

(5) 発見の「…タ」は、発話時直前において観察された状態 p を、発話時に開ける同一の状態 p から切り離して独立に叙述することにより、発話時以前

² 例えば、牧野 (1978, 1996) によると、人為性の低い行為ではガ可能の方が好まれる (人為性低 > ガ)。

(i) a. 次第に太郎はモーツァルト |が/???を| 弾けるようになった。

b. なんとなく筆を動かしているうちに、絵 |が/???を| 描けてしまった。

(牧野 (1978: 194))

その他、動詞のタイプ (知覚・認識 > ガ, 漢語 > ヲ), 完結性 (telic > ヲ), 述語動詞と目的語の距離 (遠 > ヲ), 情報構造 (強調 > ガ) 等の要因も格標示に影響するとされる (cf. 入江 (1991), 青木 (2008), 柴谷 (1978), 久野 (1973))。しかし、これらが示すのは、可能文を量的に分析した場合に見られる「頻度・傾向」である。個々の可能文を派生するとき、どういう制約・規則がその文の格フレームを決めるのかといった質的研究は、管見では牧野 (1978, 1996) 以外は皆無である。実際、三原 (1994: 139) は「結局のところ、どの述語がどの格パターンを取るかについては、述語ごとにレキシコンで指定しておく他はない」と結論している。

に観察行為があったことを暗示する表現である。

(井上 (2001 : 145), 下線引用者)

(4 a, b) いずれにおいても、話し手は目の前の事態を観察して、「君がフランス語を読める」「太郎がウイスキーを飲める」という可能性を発見している。「タ」はこのような観察、発見のあったことを表すのである。

ところで、(2), (3) と (4) とを比較すると、(4) では目的語をヲ格で標示することができないことが分かる³。このことから (6) の制約が得られる。

(6)「発見のタ」が可能文に現れると、ガ可能が義務的となる。

本稿の目的は、(6) がなぜ成立するのかを明らかにすることである。

ただし、(6) がカバーする「可能+発見のタ」文のデータの範囲は、(4 a, b) のような現時の可能性を表すものに限られないかもしれない。次の例を見てみよう。

- (7) a. 試しに袖を通してみたら S サイズの服 {??を/が} 着られた。
 b. ネットで注文したら ものの5分で チケット {??を/が} 取れた。
 c. 徹夜で頑張っって、ギリギリで レポート {??を/が} 書けた。
 d. 太郎にやらせてみたところ、200 キロのバーベル {??を/が} 挙げられた。
 e. 昨日釣りに行ったら 大物 {??を/が} 釣れた。
 f. 昨日のコンサートでは 素晴らしい演奏 {??を/が} 聴けた。
 g. 天気は良くなかったけれど 意外にいい写真 {??を/が} 撮れた。

いずれの文も、「できるかどうか分からないが、やってみたら…」という文脈に現れる可能文である。このような文脈で可能文が用いられると、ガ可能が義務的である。「やってみたら」という部分が (5) でいうところの「観察行為」にあたり、それを反映して可能文には「発見のタ」が現れているとしたら、こ

³ ただし、少数ながら (4) のヲ格標示を容認する話者もいるようである。以下は、(4) のヲ格標示を容認しない話者の心的文法の議論であると諒解されたい。

のような過去の可能性を表す可能文の格標示も (6) により制約されているということになるだろう。

しかしながら、(7 a-g) の「タ」が「発見のタ」であると即座に断定するにはいくつか問題がある。まず、(5) の定義に従えば、「発見のタ」は「発話時直前」に観察される事柄に付く。しかし、(7 a-g) の観察行為の時点 (= やってみた時) は、明らかに発話時以前でもよい。さらに、日本語の時制システムでは過去の事柄には過去を表す助動詞「タ」(あるいは「テイル」) が付かねばならない。ゆえに、(7 a-g) の「タ」も「過去」を表すと考える方が自然である。もし (7 a-g) の「タ」が「発見」を表すムード表現であるとする、これらの文に限っては時制の標示がなくてよいなどと言わねばならなくなってしまうだろう。このような例外をもうけることは明らかに好ましくない。(7 a-g) の文法性を (6) によって説明しようとするならば、その前に、(i) 過去の事柄に「発見のタ」が付くことがそもそも可能なのか、(ii) 可能であれば、その場合日本語の時制ルールとどのように折り合いを付けているのか、まず明らかにせねばならない。

以下の議論は次の順序に従って進めていくことにする。まず第2節で、「発見のタ」の意味と統語的制約、可能な分布範囲を明らかにする。第3節では、「可能+過去のタ」と、「可能+発見のタ」の可能文を区別する意味的・統語的特徴を考える。これらの議論を踏まえ、第4節で (6) がなぜ成立するのかという問題に答える。第5節で、本稿が提案する分析からもたらされる予測を2つ検証して、予測が正しいことを示す。第6節は結論である。

2. 発見のタ

2.1. 「発見のタ」の統語制約と意味解釈

「過去のタ」は、命題内容が真である (と話し手が言明する) 時点が発話時よりも前であることを表す。しかし、次の例に見るように、発話時に真である命題にも「タ」が付くことがある。

- (8) a. 発見：ああ、こんなところにあった。
 b. 想起 (思い出し)：そうだ、明日は休みだった。
 c. 確認：君は確か岡山の出身だったね。
 d. 命令：さあ、行った、行った。

- e. 判断の内容の仮想：早く帰ったほうがいいよ。
 f. 反事実性：僕に財産があつたなら，何でも買ってあげられるのに。
 (益岡 (2000: 23) より改変)

これらの「タ」が過去を表さないことは明らかである。このような「タ」を，話し手の心的態度を表すモード（叙想）表現であると見なす点で，先行研究の意見は一致している⁴。(8 a-f) のように，「モードのタ」は（説明の便宜上または異なる語彙素として）種類分けされることが多い。このうちの「発見のタ」は，(5) ですでに述べたとおり「観察行為」のあったことを表すが，さらに言えば，観察行為によって初めてその事態が存在することに話し手が気づいたことも表す (cf. 町田 (1989: 88))。

先行研究でよく指摘されることだが，「発見のタ」は状態的な命題にしか付くことができない⁵。次の例を見てみよう。(括弧はいずれも引用者による。)

- (9) a. あ，[あっ]-た。 (益岡 (2000: 24))
 b. (店が開いていると思ってやってきたが，実際には閉まっているのを見て) なんだ，[休みだっ]-たのか。 (上掲書 p.26 より改変)
 c. あら，[頭が痛かっ]-たんですか。 (工藤 (2001: 21))
 (10) a. あれっ，[[雨が降っ]-てい]-たのか
 b. やっぱり [[ここに落ち]-てい]-た。 (益岡 (2000: 25-26))
 (11) なんだ，[[こんなところで おやつを食べ]-てい]-たのか。

「タ」が付ける述語句の主要部は，存在動詞，述語名詞，形容詞，「テイル」な

4 寺村 (1984) によると，「タ」は話し手の思い描く心象が過去であることを表す。他にも，話し手の何らかの態度を表す (国広 (1967))，話し手の想起・発見というモードの意味を表す (工藤 (2001))，話し手にとっての情報のアクセスポイントが過去であることを表す (定延 (2004)) などの意見がある。

5 町田 (1989: 87-88)，益岡 (2000: 29)，森田 (2002: 276)，工藤 (2001) など。一方，定延 (2004: 28) は，赤ん坊が笑うのを見て「あ，笑った」のように言うときの「タ」も「発見のタ」と見なし，この一般化は必ずしも当てはまらなると主張する。しかし，益岡 (2000)，井上 (2001) はこれを「発見のタ」とは別物であるとしている。本稿もこの立場に従う。

6 「テイル」は，「動きを状態として表す」ものである (日本記述文法学会編 (2007: 27))。「状態」にはいくつかの種類があるが，(10 a, b) の「テイル」はそれぞれ進行中，結果状態を表す。

ど、状態性を表すものに限られる⁶。動態的な動詞に「タ」が付いても、「単純過去」「現在完了」といったテンス・アスペクト的な解釈しかあり得ず、「発見」のニュアンスを表すことはない。

- (12)a. この本なら [中学の時に読ん]-だ。 <単純過去>
 b. この本なら [もう読ん]-だ。 <現在完了>
 (工藤 (2001: 45) より改変)

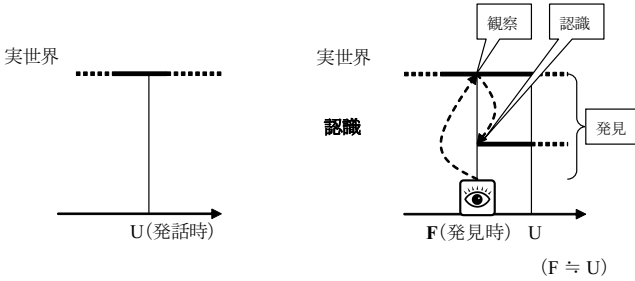
どうして「発見のタ」は [+状态的] な述語句を選択せねばならないのだろうか。定延 (2004: 23) はこれを意味的な制約であるとして、次のように説明する。

- (13) ミクロ探索は一瞬で行われるので、一回のミクロ探索で得られる情報はそう多くない。発話直前に或るモノを発見した場合、発話直前のミクロ探索で得られる情報は、ごく基本的な情報にかぎられると考えても自然ではないだろう。[...] 文型の制約はこれを反映したものと考えることができる。

簡潔に言えば、「発見のタ」は「ハッと気づいたこと」に付くのである。一瞬で気づくことのできる事柄といえ、何かがある場所・状態にあること、ある性質を持つことなどであろう。いずれも状態的な事柄である。「おやつを食べる」「友達と話す」といった非状態的な事柄は時間的な幅を持つから、「ハッと気づく」対象とはならない。(もちろん、(11) のような「事態の一部」であれば可能である。この場合も、「テイル」が付くことで述語句全体が [+状态的] になっている。)

以上の議論を踏まえ、目の前の事態を描写するのに「発見のタ」を使わない場合と使う場合では意味解釈がどのように異なるのか、図示する。

- (14) a. 「(店は) 休みだ」 b. 「なんだ、(店は) 休みだったのか」



一番下の横軸は実世界での時間の流れを表す。一番上の線のうち、太線はその時、実際の世界において「店が休みである」ことが成立することを表す。点線部分はその命題の真偽が不明（または当該談話において無関係な情報）であることを表す。

(14 a) の発話が意味するのは、発話時 U において店が休みであることである。話し手が発話の時点で初めてそれに気づいたのか、それより前から気づいてたのか、この発話からは分からない。話し手は単に発話時に成立している事態を述べるだけである。

それに対して、(14 b) の話し手は、店が休みであることだけでなく、ある時点（発見時 F）で瞬間的に事態を観察し、それによって初めてその事態を認識する、という発見のプロセスがあったことも伝えている。(14 a) にはない「認識」の段が加わっていることに注目されたい。F 時に観察されたのと同じの事態が、F 時から初めて話者の「認識」の中に存在するようになる。これが「発見」の意味をもたらすのである。

なお、発話時 U と発見時 F には実時間的な違いが設定されているわけでは必ずしもない。F が設定されているのは、上述のように「発見」の意味を表すのに必要だからである (cf. 定延 (2004:32-34))。(5) や (13) の説明にあるように、U と F はほとんど同時であってよい。また逆に、次節の議論で関わってくることであるが、U と F が大きく離れている可能性も排除されないことに注意されたい。

2.2. 過去命題と「発見のタ」

2.1 節で概観したように、ほとんどの先行研究は、発話時に真である命題（以降、現在命題と呼ぶ）に「発見のタ」が付く場合を扱ってきた。現在命題に「タ」

が付けば、それが何らかのムード表現であることは明らかである。

しかし、逆は必ずしも真でない。つまり、「発見のタ」が付くのは現在命題のみであるとは限らない。論理的には、過去の特定時に真であった命題(以降、過去命題と呼ぶ)について、話し手の発見の気持ちを表すために「発見のタ」が付くこともありうる。この節では、それが実際に可能であることを主張し、過去命題に「発見のタ」が付いた場合の意味解釈と統語構造・統語制約を考える。

過去命題の文でも「発見」のニュアンスを感じさせる場合のあることは、これまでも指摘されてきた。そのような文の例として、(15)、(16)を挙げる。

(15) (やしきの様子を見に行った子分が親分のところに戻って報告する)

a. やしきの門はあいていました。

b. 門はだいぶこわれていました。 (高橋 (1985: 291-292))

(16) (今日太郎からもらったCDを聞きながら、日記を書いている)

今日太郎からCDをもらった。ベートーヴェンの「第九」だった。

(井上 (2001: 138) より改変)

高橋 (1985: 292) は (15) を「てい察報告の文」と呼ぶ。子分は、屋敷の様子を偵察に行き、その時に「発見」したことを報告している。(16) も同様、書き手は、太郎にCDをもらった時に「発見」したことを記している。

「発見」のニュアンスを感じさせる「過去命題+タ」文の存在を指摘した高橋、井上はともに、これが「発見のタ」であると主張してはいない。しかしながら、井上は (16) の「タ」について、「発見の「…タ」とはいえないが、本質的に同じメカニズムにささえられていると見られる」(p. 138, 下線引用者) という。つまり、次のような「観察行為」があり、「(見たら) …だった」ということを表すために、すなわち発話時以前に何らかの観察行為があったことを暗示するために、「…タ」が用いられ」(p.141) ているような感じがするのである。

(17) CDをもらった。→もらったCDを見た。→「ベートーヴェンの『第九』である」という状態が観察された(「ベートーヴェンの『第九』である」ことが分かった)。(井上 (2001: 138))

高橋, 井上が (15), (16) の「タ」を「発見のタ」であると見なさないのは、次のような論法に従ったためだと思われる。

- (18)a. 大前提 (日本語の時制ルール) : 過去命題には過去の助動詞「タ」(または「テイル」) が付く。(「昨日 花子は 髪を{*切る/切った/切っている}」)
- b. 小前提 : (15), (16) は過去命題である。
- c. 結論 : (15), (16) の命題に付いている「タ」は過去の助動詞である。

しかしながら, (18c) の結論を導くためにはもう一つ, 前提が必要である。すなわち, 「(15), (16) には「タ」が一つしか含まれていない」という前提である。この前提ゆえに, (15), (16) の「タ」が過去・発見のどちらかであると考えねばならない。そうすると, (18a) の大前提より過去の助動詞の存在は必須であるから, (15), (16) の「タ」は過去を表す, と結論するほかなくなる。

しかし, 「時制」と「ムード」は本来異なる階層に属する表現である (cf. 澤田 (1993), Rizzi (1997), Cinque (1999))。可能性としては, 2つの「タ」がそれぞれの統語位置に現れるが, 形態的には1つの「タ」として出力されるため, 表層に現れた「タ」が過去・発見いずれの意味をも持つように見える, ということもありうる⁷。そして, このように考える方が, 現在命題に「発見のタ」が付く場合の述語の形態論もうまく説明することができる。本稿では「時制」と「発見」がそれぞれ次のような位置に現れると考える。

- (19)a. [現在命題+発見のタ]: あれ, [_{TP}[_{MP}[_{AspP} 雨が降ってい]た]_者] のか⁸
- b. [過去命題+発見のタ]: 行ってみたら [_{TP}[_{MP}[_{AspP} 門があいてい]た]_た]

(19a) は発話時現在に成立する状態を述べる文である。現在命題であるので

⁷ 2つの助動詞があるはずなのにそのうち1つしか出力されないことは, 二重使役化構文などでも観察されている。

(i) [太郎が [一郎に [次郎を歩か] せ] させ] た。 (Shibatani (1976: 244) より改変)

⁸ MはMoodを表す。(19)ではTPがMPを包含する構造となっているが, Cinque (1999) などのカートグラフィに従えば逆の構造になるであろう。いずれの構造を設定しても本稿の議論には影響しない。

「非過去のル」, 発見のニュアンスを表すために「発見のタ」の両方が統語に現れるが, 両者が共起した場合には前者が出力されない。

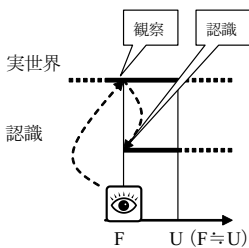
日本語では, 過去命題と同じく現在(非過去)命題の時制も然るべくマークされねばならない。従って「現在命題+発見のタ」文には出力されない時制要素があるということはどのような形にせよ想定せねばならない。そして, 「現在命題+発見のタ」文に出力されない「非過去のル」があると想定するならば, 「過去命題+発見のタ」文にも出力されない時制要素があるとも考えることも容認されるはずである。(19b)は(19a)と平行な構造をしている。「過去のタ」と「発見のタ」の両方が現れており, 前者によって時制ルールが満たされる。しかし, 後者の「タ」があるためPFで出力はされない⁹。

こう考えれば, 発見のニュアンスを持つ(15), (16)のような過去命題の「タ」について, 「同じメカニズム」が働いているが「発見のタ」とは見なせない(井上(2001: 138))とか, 「発見性」はあるが「過去性」の方が強いから「発見のタ」ではない(cf. 高橋(1985: 292))とかいった, どちらつかずの説明をしなくてすむ。説明としてより好ましいであろう。

以上の考察にもとづき, 「現在命題+発見のタ」文と, 「過去命題+発見のタ」文の意味的な違いを図示しておこう。

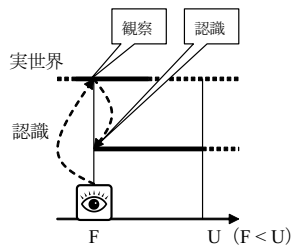
(20) a. (目の前の発見を述べて)

「なんだ, 休みだったのか」



b. (過去の発見を述べて)

「昨日行ってみたら, 休みだった」



いずれも「観察-状態の判明」という「発見」のニュアンスを持つ。唯一の違いは, 発見時が発話時とほぼ同時であるか否かである。その違いは, 統語的に

⁹ 「想起(思い出しのタ)をデータに, 加藤(2009)も同様の主張をしている。

(i) モダリティ用法的タは状態性の述語の時制を中和し, 過去の状態でも非過去(現在)の状態でも, 形態論上同じように標示する。(加藤(2009: 18))

は時制要素の違い（「非過去のル」または「過去のタ」）として現れるが、時制要素は「発見のタ」と重なると出力されないため、表層上は違いが現れない。

次に、過去命題に「発見のタ」が付く場合の統語制約を考えることにしよう。

2.1 節で見たように、現在命題に「発見のタ」が付く場合、その述語句は [+状態的] でなくてはならない。同じことが、過去命題に「発見のタ」が付く場合にも観察される。(15), (16) の述語はいずれも状態的である。次の例が示すように、状態的でない述語句に「発見のタ」が付くことはできない。

- (21)a. *昨日花子に会ったら, [花子は太っ]-た。 (→^{OK} 太っ]-てい]-た)
 b. *さっき窓の外を見てみたら, [雨が降っ]-た。 (→^{OK} 降っ]-てい]-た)

2.3. まとめ

第2節の議論は次のようにまとめられる。「発見のタ」は、話し手が自分の目の前の実世界を瞬間的に観察し、それにより初めてある事態が認識されたこと（つまり、ハッと気づいたこと）を表すムード表現である。

「発見のタ」を解釈するために、発話時 U と別に発見時 F が設定されるが、この2つの時点は実時間において区別されてもされなくてもよい。

統語的な特徴だが、「発見のタ」は現在命題にも過去命題にも現れることが可能である。ただし、いずれの場合も必ず [+状態的] な述語句を要求する。

以上、過去命題に「発見のタ」が付けることは分かった。次に、「過去の可能」という過去命題にも「発見のタ」が付けるのか、その場合、「過去のタ」(のみ)が付いた可能文とはどのように意味が異なるのかを考えることにしよう。

3. 「可能+発見のタ」文

3.1. 可能文と実現含意

可能文に「発見のタ」が現れる場合を考察する前に、過去時制の可能文の「実現含意」の解釈について確認しておく。

英語の過去時制の可能文には、*was/were able to* を用いるものと、*could* を用いるものがあるが、Coates (1983) によると、過去の特定期に言及する文脈でこれらを用いると、*factuality* の含意（「実現含意」と訳すことにする）が異なるという。次の例を見てみよう。

(22) a. He *was able to* get back.

b. He *could* get back.

(Coates (1983: 129))

Coatesによると、(22 a) は、「彼が帰ってくる可能性があった」のみならず、「実際に彼が帰ってきた」ことも意味するという。それに対して、(22 b) は可能性について言及するのみである。彼が実際に帰ってきたかどうかは分からない(か、明らかにする必要がない)。つまり、*was/were able to* は「可能性＋実現」、*could* は「可能性」のみを表すのである。

今度は日本語の過去時制の可能文の実現含意の有無を考える。次の例を見てみよう。

(23) a. 昨日は ビールを好きなだけ飲めた。 [ヲ可能]

b. 昨日は ビールが好きなだけ飲めた。 [ガ可能]

(24) a. だから、たくさん飲んだ。 [実現]

b. でも、一滴も飲まなかった。 [非実現]

(23 a), (23 b) それぞれの後ろに (24 a), (24 b) の文を続けることができるかどうか、考えてみよう。すると、いずれの組み合わせも可能であることが分

¹⁰ ただし、*could* とは異なる点もある。*could* は、実現含意を持つ *was/were able to* とパラダイムを成すため、*was/were able to* との「差異」も解釈に入り込む。つまり、ある文で *could* を使うと、その文で *was/were able to* を使わない理由も聞き手に推測されることになる。その結果、可能性こそあったが「実現はしなかった」「実現したかどうかまでは分からない」という含意が語用論的に導出される。従って、次例のように実現を暗示する表現と *could* が共起すると2つの含意が矛盾し、おかしい感じがする。

(i) **I left early and could get a seat.* (Huddleston and Pullum (2002: 197))

(ii) **I could finally find a really nice dress in sale.* (Swan (1995: 105))

(上記の説明は、上掲書を含む数多くの英文法書で見られる。ただし、筆者のインフォーマント4名中3名は、(i), (ii) を容認した。*could* と *was/were able to* がパラダイムを成すと見なすかどうかには個人差があるのかもしれない。見なさない人にとっては *could* が上述の語用論的含意を持たないはずであるから、実現を暗示する表現と矛盾を起こさないであろう。なお、*could* の含意解釈に個人差のあることは鷹家・林 (2004: 58-59) にも報告がある。)

日本語のヲ可能・ガ可能にはこのようなパラダイムがないため、「実現はしなかった」「実現したかどうかまでは分からない」のような語用論的含意は生じない。従って、(24 a) や次例のように、実現を暗示する表現と共起することが可能である。

(iii) 昨日は早く帰宅したので、久しぶりに 家族揃って夕食|を/が| 食べられた。

(iv) セールで歩きまわり、やっと 素敵なドレス|を/が| 見つけられた。

かるだろう。もし、可能文の意味に「実現」が含まれるのなら、(24 b) のような「非実現」を表す文が続くと矛盾を引き起こしてしまい、おかしい感じがするはずである。逆に、可能文の意味に「非実現」が含まれるのなら、(24 a) のような「実現」を表す文が続くはずがない。この観察から、 \forall 可能、 \forall 可能とも、それ自体は *could* と同じく「可能性」しか表さないことが分かる¹⁰。可能性が実現したかどうかは、可能表現からではなく、文脈から判断される。

3.2. 2 タイプの実現含意：「できた」のか、「やったらできた」のか

次に、 \forall 格・ガ格いずれの格フレームも容認される文脈で用いられる可能文と、ガ格フレームしか容認されない文脈で用いられる可能文の実現含意の違いを見ていこう。例として、(25)、(26) を挙げる。

- (25) a. 昔はやせていたので、卒業式ではこの S サイズの服 {を/が} 着(ら)れた。
 b. 先月、試しに袖を通してみたら、この S サイズの服 {??を/が} 着(ら)れた。
- (26) a. 昨日は許可証があったから、庭の写真 {を/が} 撮れた。
 b. 天気は良くなかったけれど 意外にいい写真 {??を/が} 撮れた。

(25 b)、(26 b) のいずれも、「できるかどうか分からなかったが、やってみたら…」という文脈で可能文が用いられている。2.2 節で述べたとおり、「(見たら) …だった」ということを表す(井上 (2001: 241)) 文脈での「タ」には「観察行為」「発見」のニュアンスが感じられる。そして、その「タ」は実際に「発見のタ」であると考えられる。(正確に言うと、出力されない「過去のタ」とともに「発見のタ」が現れている。) 前節の議論に従えば、(25 b)、(26 b) にも「発見のタ」が関わっていると考えることは妥当であろう。この場合は、「やってみたら…」という試行が観察の準備にあたり、その結果 (つまり実現) を観察することにより、話し手の認識が「できるかどうか分からない」状態から、「できると分かる」状態へと変化する。つまり、話し手は実現を観察することで、実現可能性の存在を発見するのである。

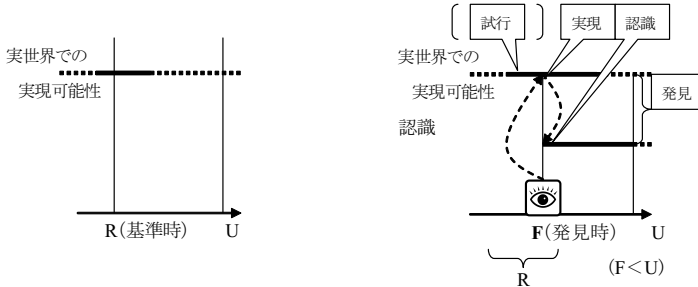
(25 a)、(26 a) にはそのような「発見」のニュアンスが感じられない。話し手は事態の実現可能性を初めから知っており、その可能性が過去の特定期にお

いて存在したことを述べるのみである。従って、これらの例に現れる「タ」は、「過去のタ」である。

(a) 文と (b) 文の意味の違いを図示する。

(27)a. 「(やせていたので)着られた」

b. 「(試しに袖を通してみたら)着られた」



(27a) が示すように、「可能+過去のタ」文が表すのは、過去特定時 (R) における実現可能性である。実際に着たかどうかまでは述べられていない。対して、(27b) の「可能+発見のタ」文が表すのは、過去特定時 (R) に「できるかどうか試してみる+成功 (=実現) する」ことが起こり、それを目の当たりにすることで話し手は「R 時においてその事態が実現可能であったこと」を発見するのである。「実現」を見て「実現可能性」に気づくわけであるから、必然的にこの可能文は「実現含意」を持つ。

(a) 文と (b) 文が「実現含意」において異なることは、「非実現」を表す文を後続させてみることで確かめられる。

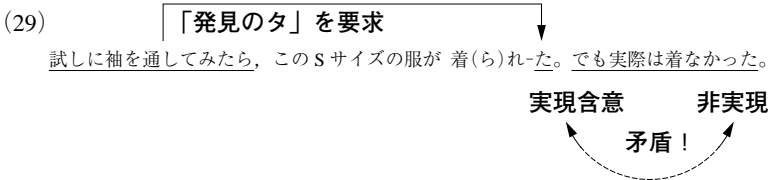
(28)a. 昔はやせていたので、卒業式ではこの S サイズの服 |を/が| 着(ら)れた。でも実際は着なかった。

b. 先月、試しに袖を通してみたら、この S サイズの服が 着(ら)れた。
#でも実際は着なかった。

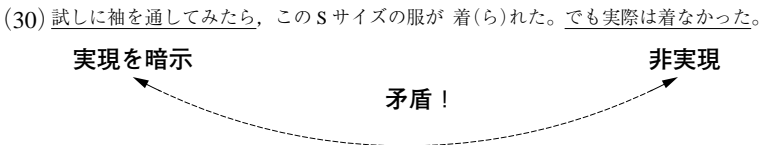
(28b) の可能文は実現を含意するから、後続文が実現を否定すると矛盾が生じる。

過去の可能文の「実現含意」がどのようにもたらされるのか、本稿の主張をここで一度整理しておく。(25b), (26b) のように、「やってみたら」という

文脈に後続する可能文には、必ず「発見のタ」が含まれる。それは必然的に可能性の実現を含意する。従って、(28 b) のように「非実現」を表す文が後続すると矛盾が生じてしまい、おかしい感じがする。これを図示すると次のようになる。



しかしながら、この議論に対して次のような反論があるかもしれない。(25 b), (26 b) の実現含意は、可能文ではなくそれに先行する文脈がもたらすものであり、それと後続文が意味的に矛盾するために (28 b) が不自然になるとも考えられる。この議論を図示すると (30) のようになる。



これが正しければ、「可能+過去のタ」と形態的に区別できない「可能+発見のタ」があるなどと言わなくてすむ。説明力が同じならば、こちらの方が議論としてより好ましいと言えるだろう。

しかし、「発見のタ」を設定しなければ、(25 b), (26 b) の格標示の制限が全く説明できなくなってしまう。(25 b), (26 b) の「タ」が「過去のタ」であると考えたならば、(25 a) と (25 b), また (26 a) と (26 b) の可能文の統語構造は全く同じになる。そうすると、(b) タイプの可能文においてのみヲ可能が容認されない事実は意味論的(語用論的)に説明されねばならない。確かに(b) タイプの文脈は実現を暗示させるが、ヲ可能とガ可能はともに「実現」の文脈でも「非実現」の文脈でも用いることができることを思い出そう(3.1節)。(b) の文脈はヲ可能の意味と矛盾しないはずである。つまり、(a), (b) のヲ可能文はいずれも先行文脈と意味的に矛盾せず、かつ統語構造が同じであるということになる。これでは、(b) のヲ可能のみが排除される事実は説明のしよ

うがなくなるであろう。

説明の可能性を残すためには、(a) と (b) の可能文は統語構造が異なると考えるしかない。つまり、(a) タイプの可能文には「過去のタ」、(b) タイプの可能文には（「過去のタ」に加えて）「発見のタ」が現れる。「発見のタ」が課す制約ゆえに、(b) の可能文はガ可能のみが容認されるのである。

それでは、「発見のタ」が具体的にどのような制約を可能文に課すのだろうか。この疑問は第4節で解決する。

3.3. まとめ

第3節の議論をまとめる。「できるかどうか分からないがやってみたら…」という先行文脈を受けて現れる可能文には必ず「発見のタ」が含まれる。「発見」とはこの場合、「やってみたら実現したのを見て、実現可能性の存在に気づく」ことであるから、この可能文は必然的に実現の含意を持つ。また、統語的特徴としては、「発見のタ」が現れる可能文ではヲ可能が容認されず、ガ可能が義務的になる。

以上の議論をふまえ、「発見のタ」が付くとどうしてガ可能が義務的になるのかを考えていくことにしよう。

4. 可能文と状態性

4.1. 可能文の統語構造

ヲ可能とガ可能の統語構造が異なることはこれまで多くの研究者が主張してきた (e.g. 久野 (1973), 井上 (1976), 柴谷 (1978), Takezawa (1987))。格付与とは、ある統語位置を占める名詞句に対する認可であるから、目的語の格の違いは、目的語の占める位置（あるいは格を付与する要素やその位置）の違いを表す。

目的語の位置が異なることを明白に示すデータが Tada (1992) により提出されている。次の例に見るように、目的語と可能の助動詞-*eru* のスコープ解釈の可能性が、ヲ可能とガ可能では異なる。

- (31)a. 太郎は右目だけを つぶ r-*eru*. [-*eru*>右目だけ, ?*右目だけ>-*eru*]
 b. 太郎は右目だけが つぶ r-*eru*. [*-*eru*>右目だけ, 右目だけ>-*eru*]

(Tada (1992: 94))

(31 a) は「太郎が右目だけを閉じること」が可能であること（つまり、ウインクできること）を表す。一方 (31 b) は、「太郎がつぶれる」のは右目だけであること（つまり、左目は病気か何かで閉じられないこと）を表す。

このスコープ解釈は目的語と可能-*eru* の統語的な階層関係を反映している。Tada によると、(31 a) の目的語は-*eru* よりも低い位置で格付与されるために狭いスコープで解釈されるのに対し、(31 b) の目的語はガ格付与のために-*eru* よりも高い位置に移動するので、より広いスコープ解釈を持つのである。(31 a, b)の構造を簡単に示すと以下ようになる。(影を付けた部分が-*eru* がc-統御する領域、すなわち-*eru* のスコープ領域である。)

- (32) a. [太郎は_{VP} [_{AGROp} 右目だけを [_{VP} t つぶ r] AGRo eru] T]
- ↑
- b. [太郎は_{AGROp} 右目だけが [_{VP} t つぶ r] eru] AGRo] T]
- ↑

一つ注意すべきことがある。(31 b) のスコープ解釈は、確かにガ格目的語が高い位置を占めることを示している。しかし、ガ格目的語がその位置に移動することを示すものでは必ずしもない。実際 Takano (2003) は、次に示すようにガ格目的語が-*eru* よりも高い位置に基底生成するという分析を提出している。

- (33) a. [太郎₁は [_{VP} PRO₁ 右目だけを つぶ r] eru] T]
- b. [太郎₁は [_{VP} 右目だけ₂が^s [_{VP} PRO₁ pro₂ つぶ r] eru]] T]
- 基底生成** (Takano (2003: 800-801) より改変)

ヲ可能、ガ可能いずれにおいても、可能-*eru* はコントロール構造 vP を選択する。ヲ格目的語はその中に作られて格も受けるが、ガ格目的語はその外、-*eru* を主要部とする VP の指定部位置に生起する。これは-*eru* が選択する項としてではなく、予弁法 (prolepsis) 的なトピックとして現れると Takano は考える。つまり、「右目だけ」という話題が提出され、それに関連して言えること（「つぶれる」）が後続するように構造が作られるのである。

(33 b) のガ格目的語のスコープ・格付与・文法関係について確認しておく。

まず, *-eru* の投射の指定部位置に基底生成するため, 当然*-eru* よりも広いスコープをとる。また, その位置は主節 T から可視的であるため, T からガ格を付与される。さらに, ガ格目的語は語彙的な述語から選択されていないが, 述語句 [_v[_{VP} PRO₁ pro₂ つぶ r] eru]] と aboutness (話題の関連性) によって結びつくことで, 「第二のトピック」のような文法解釈を得る。

ガ格目的語が表層位置, すなわち非 θ 位置に基底生成するという主張を支持する証拠として Takano が提出した例 (34), (35) を見ることにしよう。これらの文が Tada, Takano に従った場合にどのような分析を受けるのか, それぞれ (a), (b) として下に示す。

(34) 私は ドイツ語が, 流暢に話す人を探せる。 (Takano (2003: 809))

a. 私は [_{AGROP} ドイツ語₁ が [_{VP}[_{DP}[_{RC} t₁ 流暢に話す]人]-を探 s]eru]AGRo]

b. 私は [_{VP} ドイツ語₁ が [_{VP}[_{DP}[_{RC} OP pro₁ 流暢に話す]人]-を探 s]eru]

基底生成

(35) 私は メアリーが その仕事を任せられる。 (上掲書 p. 811)

a. 私は [_{メアリー}₁ が [_{VP}[_{AGROP} その仕事₂ を [_{VP} t₁ t₂ 任せ] AGRo]rareru]]

b. 私は [_{VP} _{メアリー}₁ が [_{VP} PRO pro₁ その仕事を 任せ]rareru]

基底生成

まず (34) では, ガ格目的語に対応する空所が関係節中に含まれている。Tada の繰り上げ分析では, 「ドイツ語」が A-移動をする際に関係節を越える (摘出領域制約 (CED) 違反) ため, (34) は容認されないことになってしまう。対して Takano の分析では, ガ格目的語は表層位置に基底生成するので, 同一指示のゼロ形代名詞 pro との距離が離れていても問題ない。

また (35) では, ガ格を付与されるのが間接目的語の「メアリー」である。この項が動詞の内項位置に生じれば, その動詞句内で二格を付与されるから, (35 a) のような格移動は起こらないはずである。ゆえに, Tada の繰り上げ分析では (35) が容認される事実を説明することができない。一方, Takano 分析に従えば, 「メアリー」は表層位置に基底生成し, 主節 T から格を付与される。埋め込まれた動詞「任せ(る)」の与えるべき二格は代名詞 pro に付与され

るため、動詞の格付与特性も満足される。

以上の観察から、Takano (2003) の予弁法分析の方がデータをより良く説明できるといえる。Takano 分析を採用すると、ガ可能の統語構造はヲ可能のそれとは次の点で異なることになる。

- (36)a. ガ可能の目的語は予弁法的トピックとして、主節に基底生成する。
 b. ガ格目的語と主節 V'(埋め込み vP+可能-(rar)eru) は aboutness により叙述関係を作る。

ここで疑問が一つ生じる。aboutness 叙述は構成素が2つあれば自由に起こりうるのだろうか。制約があるとしたら、どのようなものなのだろうか。ガ可能文の性質をより詳しく知るため、次節ではこの疑問を考えることにする。

4.2. Aboutness 叙述にかかる制約

三原・平岩 (2006: 190) によると、aboutness によって叙述関係が作られる構文には、少なくとも次の2つがある。

- (37)a. 太郎が、背が高い。 [多重主格構文]
 b. 私は花子を、天才だと思った。 [認識動詞構文]

この節では、これらの構文に aboutness 叙述が含まれると考えられる証拠を提出するとともに、その叙述形成に課される制約を明らかにする。

4.2.1. 多重主格構文

まず多重主格構文について、Takahashi (2007) の議論に従ってその構造を調べていく。多重主格構文とは、文頭にガ格を持つ名詞句が複数あられ、それらがいずれも述語(述部)の主語であるように見える構文である。久野(1973)によれば、典型的な多重主格構文は、基底構造において「名詞句+ノ」であったものに主語化操作が加えられることで派生される。派生された文頭のが格名詞句を、ここでは「新主語」と呼ぶことにする。

(38)

多重主格構文

- a. [日本の 男性]-が 短命です → 日本が 男性が 短命です
 b. [山の 木]-が きれいです → 山が 木が きれいです
 c. [太郎の お父さん]-が 死んだ → 太郎が お父さんが 死んだ
 d. [太郎の 子ども]-が 先生に 叱られた →

太郎が 子どもが 先生に 叱られた

(久野 (1973: 39-40) より改変)

具体的に「主語化」がどのような操作であるのか、先行研究の提案は大きく2つに分かれる。一つは、新主語が後続する名詞句内部の θ 位置から移動して派生主語になるという考えである (cf. Kuroda (1988), 長谷川 (1999))。あるいは、新主語が表層の非 θ 位置に基底生成され、 θ 位置にある音形ゼロの代名詞 (pro) と同一指標によって関係づけられるという分析もある (cf. 柴谷 (1978))。

Takahashi (2007) によると、これら2タイプの分析のどちらも正しい。ただし、いずれの方法で多重主格構文が派生されるかは、述語のタイプにより決定される。述語が [+状態的] であれば新主語は非 θ 位置に基底生成される。このタイプの多重主格構文を、以降 S-MS (Stative Multiple Subject Construction) と呼ぶ。一方、述語が [-状態的] であれば、新主語は θ 位置に生起し、表層位置に移動することで新主語のステータスを得る (以降, NS-MS (Non-Stative Multiple Subject Construction))。Takahashi が提案するそれぞれの多重主格構文の構造は以下のとおりである。

(39)a. S-MSs: [_{CP} 太郎₁ が_T [_{VP} [_{AP} 妹が₁ きれい] _{t_V}] _{t_T}] だ-T-C¹¹

基底生成

[+状態的]

b. NS-MSs: [_{TP} 太郎₁ が_T [_T [_{t₁} 妹が₁]₂ [_{VP} _{t₂} 結婚した]] _T]

↑
移動

[-状態的]

(Takahashi (2007: 26) より改変)

¹¹ 正確に言うと、Takahashi は新主語が TP 指定部位置 (主語位置) に基底生成され、CP 指定部位置 (新主語位置) に移動するとしている。いずれにしても、基底生成されるのは非 θ 位置である。本節の議論には関係しないので、ここでは新主語の TP-CP 移動を表示せず、CP に基底生成されるように表示することにする。

(39 a) は述語が [+状态的] であるので、新主語は初めから述語句の外に作られている。新主語(「太郎」)と述語句(「妹がきれいだ」)は aboutness によって叙述関係を作る。一方、(39 b) の述語は [-状态的] であるので、新主語は初めにもう一つの主語(「妹」)内部の属格関係を表す θ 位置に生起し、そこから主語位置に繰り上げられる。

動詞の状態性によって多重主格構文の構造が異なることを示す証拠として、Takahashi は次のような例を挙げる。(ただし (41 a, b) は Takahashi の議論に対応するように筆者が作例したものである。)それぞれ、(a) が S-MSD, (b) が NS-MSD である。

- (40) a. ジョン₁が 父₂が 自分*_{1/2}の 息子に 厳しい。
 b. ジョン₁が 妹₂が 自分_{1/2}の 部屋で 殺された。 (上掲書 p. 27)
- (41) a. あの店が 食中毒事件が 多い。
 b. *あの店が 食中毒事件が 起こった。
- (42) a. 週末が どこでも 宴会が 多い。
 b. *太郎が まちがって 妹が 人をはねた。 (上掲書 p. 29)

まず (40 a, b) であるが、新主語が「自分」の束縛子になれるかどうかの違いを表している。Takahashi はこの違いを次のように説明する。(40 b) の新主語は主語内の θ 位置 (A 位置) に生起するため、「自分」の束縛子になれる。対して、(40 a) の新主語は非 θ 位置 (A' 位置) に生起するため、「自分」の束縛子になれない。

次に (41 a, b) の非対称を考える。この例の新主語は副詞的な要素であるから、(39) に示したような「基底構造」(新主語をどこかしの θ 位置に関係づける構造)を設定することができない。S-MSD の新主語は初めから非 θ 位置に生起するため、この文が「基底構造」を持つ必要はない。従って、S-MSD の新主語は副詞的な要素であってよい ((41 a))。しかし、NS-MSD の新主語はまず θ 位置に生起せねばならないため、副詞的な要素が新主語になることはない ((41 b))。

(42 a, b) は、新主語と主語の間に付加詞が介在できるかどうかの非対称である。(42 a) の新主語は初めから表層位置に生起するため、主語との間に別の要素があっても問題ない。しかし、(42 b) の新主語は主語の内部から移動

してくる必要がある。この文が容認されないのは、途中の付加詞がその移動を阻止するためである。

以上の観察から、いわゆる「多重主格構文」は1つの構文ではなく、述語タイプによって2つの異なる構造を持つことが分かる。そして、本稿の目下の関心である aboutness 叙述は、新主語と [+状态的] な述語の間にのみ成り立つ。この結論を (43) にまとめる。

- (43) 多重主格構文が aboutness 叙述により形成される時、その述語は [+状态的] でなければならない。

4.2.2. 認識動詞構文

次に、認識動詞構文における aboutness 叙述とその制約を見ることにしよう。「思う」「信じる」などの認識動詞が命題を内項に取るとき、その命題の主語に相当する名詞句は、主格ガだけでなく対格ヲで標示されることも可能である。ヲ格標示される場合を「認識動詞構文」と呼ぶことにする。ヲ格標示される要素は名詞句でなくてもよく ((44 b)), また、埋め込み節中の新主語に相当する要素であってもよい ((44 c))。

- (44) a. 私は 花子_i を/が_i 天才だと思った。
 b. 私は [_{pp} 東京からつくばまで]_i を/が_i とても遠いと思った。
 c. 太郎は 花子_i を/が_i 性格が悪いと思っている(らしい)。

((b, c) は竹沢・Whitman (1980: 55, 57))

これまでの研究では、ヲ格標示される要素が従属節の主語位置からヲ格付与位置にまで繰り上げられる (cf. Kuno (1976)), あるいは主節のヲ格付与位置に基底生成して従属節内の空所 (PRO または pro) と同一指標で結びつけられる (cf. 竹沢・Whitman (1998)) という、2タイプの分析が提案されてきた。後者の分析を支持する Takano (2003) によれば、認識動詞構文は次のように分析される。

- (45) 私は [_{vp} メアリー_i を [_v [_{cp} pro_i 天才だと] 信じてい]る]]

(Takano (2003: 804) より改変)

Takano によれば、「メアリーを」は予弁法的なトピック（大目的語）として主節動詞句の指定部位置に生起する。そしてそれは、影を付けて示した述語句 V' と aboutness によって関係づけられる。

大目的語が主節に基底生成されることを支持する証拠を Takano はいろいろ挙げています。その一部は後で触れるが、その前に、Takano が提案する構造の問題点を指摘し、分析を一部修正する。

(45) では、大目的語（「メアリーを」）は主節動詞（「信じてい(る)」）の指定部、命題項 CP（「*pro* 天才だと」）はその補部を占めている。つまり、大目的語は埋め込み節 CP の外にあることになる。しかし、大目的語が CP の支配下にあることを示す証拠がある。次の例を見てみよう。これらは、不定語「誰」を、認可子「モ」が離接位置から認可できるかどうかを示したものである。

- (46) a. 太郎は [_{DP} 誰が書いた論文]-も 読まなかった。
 b. *誰が_i [_{vP} t_i 花子を責め]-も しなかった。
 c. 太郎は 誰を 馬鹿だと-も 思わなかった。

(Hiraiwa (2007: 97, 101) より改変)

(46 a) のとおり、名詞句 (DP) に付加した「モ」は、その支配下にある「誰」を認可できる。一方、動詞句 (vP) に付加した「モ」は、外項「誰」を認可できない。「誰」は vP 内に生起するが、(顕在的または陰在的に) 主語位置へ移動するため、最終的な統語表示 (LF) では vP の支配を受けないことになる。この観察より、次のような制約があると考えられる。

- (47) 不定語 (の連鎖メンバー全て) は、LF において、認可子「モ」に支配されねばならない。なお、「モ」は、それが付加したラベルの支配する項 (term) を支配する。

「モ」は、日本語学で「とりたて詞」と呼ばれる助詞の一種だが、Kuroda (1965 [1979]) の分析によれば、とりたて詞は (少なくとも基底構造においては) XP レベルのラベルに付加をし、その支配下にある要素を取り立てることができる。本稿の分析はこのアイデアに従ったものである。(なお、(46) のデータを提出した Hiraiwa (2007) は、「モ」の付加位置や不定語の認可条件、認識動詞

構文について異なる主張をしている。Kuroda に従えば Takano 分析の修正が最小限にとどめられるため、本稿は Hiraiwa 分析には従わない。))

(47) の認可条件を用いて、今度は認識動詞構文 (46 c) の構造を探ることにしよう。この場合は大目的語が不定語である。認可子「モ」は補文標識「ト」に後続し、主節動詞に先行することから、CP に付加していると考えられる。(47) より、「モ」が認可できるのは CP 内にある要素だけである。(46 c) が容認されることから、大目的語は CP 内に生起する (そしてそこにとどまる) と考えねばならない。Takano 分析では大目的語が CP の外に生起するが、(46 c) を説明できるように修正する必要が出てくる。

後で示す証拠から、大目的語は非 θ 位置に基底生成すると考えねばならない。また、主節動詞から γ 格を付与されるため、主節動詞から可視的な位置にあるはずである。さらに (46 c) から、大目的語は埋め込み節 CP 内にあると考えねばならない。これらが整合するよう Takano 分析を修正し、以下の構造を提案する。

- (48) a. 私は [vp_{CP} メアリー_i を [tp pro_i 天才だ] と] 信じてい] る。
 b. 太郎は [vp_{CP} 誰_i を [tp pro_i 馬鹿だ] と]-も 思わなかつ] た。(= (46 c))

認識動詞は CP を内項に取り、aboutness による叙述はその内部で形成される。影を付けた部分が aboutness 述語句である。Takano は主節 V' を述語句としたが、修正分析では埋め込み節の TP が述語句となる。大目的語は CP 指定部に基底生成する。よって、(46 c) (= (48 b)) の CP 付加の「モ」は大目的語「誰」を認可できる。また、CP 指定部は位相 (phase) の縁 (edge) であるから、大目的語は主節動詞から可視的であり、 γ 格を付与される (cf. Chomsky (2001))。

次に、Takano の予弁法分析を支持する証拠を検討し、修正した予弁法分析でもこれらのデータが扱えることを確かめる。次の例を見てみよう。(例に書き加えた構造は、Takano 分析ではなく、修正分析に合わせたものである。)

- (49) a. メアリーは [cp 3 人の学生_i を [tp pro_i 全ての先生に t_i 紹介されるべきだ] と] 思っている。 [3 人 > 全て, *全て > 3 人]
 b. みんなは [cp メアリー_i を [tp [dp [rc pro_i 話す] 言葉]-が 上品だ] と] 思っている。
 (Takano (2003: 807, 809) より改変)

まず (49 a) における数量詞「3人」と「全て」のスコープ解釈を考える。この文では「3人」の方が広いスコープを取る解釈しか許されない。しかし、繰り上げ分析ではこの事実を捉えることができない。大目的語の痕跡 (t_i) が「全ての先生」のスコープ領域にあるため、(49 a) には「全て > 3人」の解釈もあるはずだと、間違った予測をすることになる。一方、予弁法分析に従えば、大目的語は TP 外に生起するため、TP 内の数量詞よりも広いスコープを取ることが正しく予測される。

次に (49 b) を見てみよう。この文では、大目的語「メアリー」に対応する θ 位置の空所が関係節の内部にある。この位置からの移動は CED 違反を引き起こすので、この文が容認される事実を繰り上げ分析では捉えることができない。一方、予弁法分析では、大目的語「メアリー」は表層位置に基底生成され、 θ 位置には同一指示の *pro* が入る。先行詞と代名詞の間は局所的でなくてよいので、この文は容認されると正しく予測できる。

以上の議論より、予弁法分析の妥当性が示されたと考える。これをふまえ、次に *aboutness* 述語に課される制約を考える。次の例を見てみよう。

- (50) a. 太郎は 花子を [_{TP} *pro* 美しい] と 思っている。
 b. 太郎は 花子を [_{TP} *pro* 天才だ] と 思っている。
 (51) a. *太郎は 花子を [_{TP} *pro* 疲れている] と 思っている。
 b. *太郎は 花子を [_{TP} *pro* 今会社で働いている] と 思っている。
 (52) a. *太郎は 花子を [_{TP} *pro* 東京にバスで行く] と 思っている。
 b. *太郎は 花子を [_{TP} *pro* 昨日東京に行った] と 思っている。

述語の意味タイプは TP 全体に浸透すると考えられる。(50)-(52) の容認度の違いから、認識動詞構文においては埋め込み節 TP の意味タイプに制約があることが分かる。まず、(52) が容認されないことから、[-状态的] な TP は *aboutness* 述語として不適切である。しかし、「テイル」が付いて [+状态的] になっているはずの (51) の TP も容認されないので、[+状态的] というだけでは不十分である。(50) と (51) の述語を比べてみると、(50) の述語は恒常的な性質・状態を表し、(51) の述語は一時的な状態を表すものであることが分かる。つまり、認識動詞構文の *aboutness* は、大目的語と [+状态的、+恒常的] な TP 述語句との間に成立するのである。

認識動詞構文において埋め込み節の述語句に意味的制約がかかることは従来から指摘されてきた (cf. Harada (2002), 佐々木 (2009))。なぜそのような制約があるのか本稿でこれ以上議論することは避け、目下の関心である *aboutness* 叙述とその述語句の制約について分かったことのうち、次節の議論に関わることをまとめておく。

- (53) 認識動詞構文の大目的語と TP 述語句は *aboutness* により関係づけられる。TP 述語句は [+状态的] でなければならない。

4.3. 「やったらできた」タイプの可能文における義務的ガ格標示

第4節のここまでの議論で明らかになったことをまとめてみよう。

- (54)a. ガ可能の目的語は予弁法的トピックとして、主節位置に基底生成される。
 b. ガ格目的語と主節 V' (埋め込み vP+可能-(*rar*)*eru*) は *aboutness* により叙述関係を作る。 (= (36))
- (55) 多重主格構文が *aboutness* 叙述により形成されるとき、その述語は [+状态的] でなければならない。 (= (43))
- (56) 認識動詞構文の大目的語と TP 述語句は *aboutness* により関係づけられる。TP 述語句は [+状态的] でなければならない。 (= (53))

Aboutness による叙述関係を成すとされる構文を3つ概観したが、そのうち2つについて、述語句が [+状态的] でなければならないという制約を持つことが分かった ((55), (56))。これが偶然ではなく、*aboutness* 叙述には次のような制約がかかると考えてみよう。

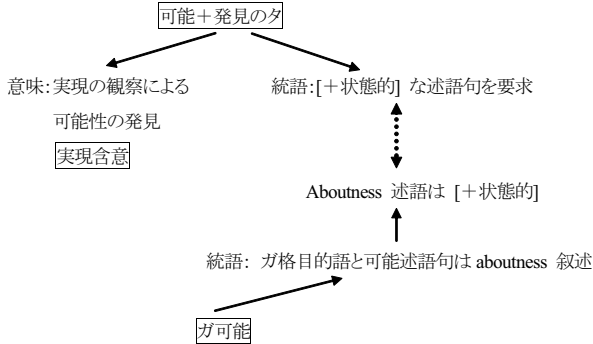
- (57) *Aboutness* 叙述の述語句は、 [+状态的] でなければならない。

これが正しければ、ガ可能文においても同じ制約が当てはまり、可能動詞句は [+状态的] であるということになる。

ここで、これまでの議論を全てまとめ、本稿のそもそもの疑問に答えることにしよう。すなわち「発見のタ」が可能文に現れると、ガ格標示が義務的と

なる」(= (6)) のはなぜかという疑問である。これまでの議論で判明したことを以下に図示し、この図を使って説明を行う。

(58)



まず、「発見のタ」は [+状态的] な述語句を要求する。従って、「発見のタ」が現れる可能文において、可能述語句は [+状态的] でなければならない。次にガ可能文であるが、ガ格目的語と可能述語句は aboutness によって叙述関係を作る。Aboutness 述語句は [+状态的] でなければならないので、この場合の可能述語句は何らかの方法で [+状态的] になっているはずである。ゆえに、「発見のタ」の要求はガ可能文の構造であれば必ず満たされるといえる。以上の理由により、「発見のタ」が現れたときにはガ可能が義務的となるのである。

(6) がなぜ成立するのかを明らかにするという本稿の目的は、これでひとまずは果たされた。ただし、次の疑問が残るかもしれない： (i) 可能文は「可能性がある」という状態を表すのではないか？ だとしたら、ヲ可能、ガ可能はそもそもどちらも [+状态的] ではないのか？ また、(ii) 可能動詞が [-状态的] であり、従って（その素性がそのまま持ち越される）ヲ可能が「発見のタ」と共起しないというのなら、ガ可能の可能述語句はどのようにしてその素性を [+状态的] に変えるのだろうか？ これらの疑問に対しては、以下可能な説明を簡潔に行うことにする。

まず (i) についてであるが、日本語の可能の助動詞-(rar)eru はそもそも [+状态的] ではないと考えられる。例 (59) が示すように、 [+状态的] な述語に「テイル」を付けることはできないが、(60) のとおり、可能の助動詞-(rar)eru の後ろには「テイル」が付けられるからである。

- (59)a. *太郎は さっき 部屋に い-ていた。
[+状态的]
- b. *部屋が 寒い-ている。
[+状态的]
- (60)a. 太郎は 子どもの頃は フランス語を 読め-てい た。
[-状态的] ?
- b. 一郎は バットが よく 振れ-ている。
[-状态的] ?
- (61)a. 太郎は 子どもの頃はいくらでも フランス語を 読んでい-られた。
[+状态的]
- b. *太郎は 子どもの頃は いくらでもフランス語を 読んでい-られ-てい た。
[+状态的]

では可能の助動詞-(*rar*)*eru* が [-状态的] かというと、そうとも言い切れない。もしそうだとすれば、(61 b) の複合的な可能述語「読んでいられ(る)」は [-状态的] であるから、その後ろに「テイル」を付けられるはずである。しかし、(61 b) が示すとおり、そのような接続は容認されない。このことから、可能-(*rar*)*eru* の状態性については次のように考えるのが妥当であろう。可能-(*rar*)*eru* は状態性の素性をそもそも持たない。可能動詞句全体の状態性は、それが選択する述語の [+/-状态的] 素性が浸透して決められる。(60 a, b) の動詞「読む」「振る」はいずれも [-状态的] である。それが浸透して、可能動詞「読める」「振れる」も [-状态的] となるので、「テイル」が付くことができる。一方、(61 b) の「読んでい(る)」は「テイル」が付いて [+状态的] であるため、それを選択する可能述語「読んでいられ(る)」も [+状态的] となる。ゆえに、その後ろに「テイル」を付けることができない。

次に (ii) の疑問を考えよう。上の説明が正しければ、[-状态的] な動詞に-(*rar*)*eru* が付けば可能動詞全体も [-状态的] となる。しかし、aboutness 叙述の述語句となる場合には、それを [+状态的] に変えねばならない。可能性としては、(i) [+状态的] なオペレータが付加する (cf. Taylor (1979), Vlach (1981)), (ii) 可能動詞句内の *pro* がオペレータ移動してその動詞句を [+状态的] な派生述語にする (cf. Chomsky (1977)), (iii) 可能動詞句は音形ゼロのコピュラ (δ) に選択されることで「コピュラ+可能動詞句」が [+状态的]

となる (cf. Hale and Keyser (2002)), などが考えられる。

- (62) a. 太郎は [フランス語₁が]_{[VP[+stative]]} OP _{[VP[-stative]]} pro₁ 話 s-eru] v]
 b. 太郎は [フランス語が]_{[CP[+stative]]} pro₁ _{[VP[-stative]]} t₁ 話 s-eru] C]
 c. 太郎は [フランス語が]_{[δ[+stative]]} _{[VP[-stative]]} 話 s-eru] δ _[+stative]]

本稿では、ガ可能の詳細な統語構造についてこれ以上議論せず、可能な分析を指摘するにとどめる。いずれにしても、ガ可能を派生する時には何らかの形で可能述語句が [+状态的] となる。ヲ可能にはそのような操作がないので、動詞が [-状态的] であれば可能動詞句も [-状态的] である。ゆえに、[+状态的] な述語句を要求する「発見のタ」と共起するのはガ可能のみである。

5. 予測

この節では、提案した分析からもたらされる予測を2つ検証して、その妥当性を確かめる。

5.1. 予測1: [+状态的] なヲ可能と「発見のタ」

「発見のタ」が共起する可能述語句は [+状态的] でないとならない。ガ可能は常に [+状态的] だから共起可能である。ヲ可能文の場合は、可能-(rar)eru が付く動詞の素性 [-状态的] が浸透して可能動詞句全体が [-状态的] となるため、「発見のタ」とは共起不可能であると論じた。

しかし、この分析が正しければ、「発見のタ」とヲ可能は常に共起が不可能なのではなく、次の場合は共起可能であることが予測される。すなわち、-(rar)eru の付くのが [+状态的] な動詞であれば、それが浸透する可能動詞句全体も [+状态的] であるため、「発見のタ」と共起できるはずである。例えば、「動詞+テイル」は [+状态的] であるから、これに-(rar)eru が付いた複合的な可能述語は [+状态的] である。従って、「動詞+テイル+rareru」からなるヲ可能文には「発見のタ」が現れうると予測される。次の例 (63 b), (64 b) の文法性が示すとおり、正しい予測である。(63 a), (64 a) との比較から、[+状态的] な「テイル」が付くことで「ヲ可能+発見のタ」の容認度が改善されたことが分かる。

- (63)a. ??昨日のコンサートでは [素晴らしい演奏を 聴 k]-e た。
 b. 昨日のコンサートでは [素晴らしい演奏を 聴 いて い]-rare た。
- (64)a. ??試しにやらせてみたら、太郎は [何本でも 論文を 読 m]-e た。
 b. 試しにやらせてみたら、太郎は [何本でも 論文を 読 んで い]-rare た。

5.2. 予測 2: [-状态的] なヲ可能と「確認のタ」

「発見のタ」は [+状态的] な述語としか共起できなかったが、他のモード用法で「タ」が用いられる場合はこの限りでない。(65), (66) は「確認のタ」の例であるが、この用法の「タ」は [-状态的] な動詞に付くことが可能である。

- (65)a. 油絵をお描きになりましたね?
 b. お名前は何とおっしゃいました?
 (三上 (1953 [1972: 226-227]) より改変)
- (66)a. キリンってたしか、鳴いたよね?
 b. (受験生 2 人の 1 人がもう 1 人に)
 ねえねえ、引力て、距離の 2 乗に反比例したっけ?
 (定延 (2004: 39))

このことから、次の予測が得られる: 「確認のタ」は [-状态的] な述語を選択してもよいので、「確認のタ」は、ヲ可能と共起可能である。次の例が示すとおり、正しい予測である。

- (67)a. 太郎はたしか、バイエルを 弾けた よね?
 b. キリンって、立ったままで 水を 飲めた っけ?
 c. 太郎はたしか、子どもの頃は バイエルを 弾けた よね?
 d. 太郎って、昔は いくらでも 酒を 飲めた よね?

6. 結論

本稿は、「発見のタ」が付いた可能文ではどうして目的語のガ格標示が義務的となるのかという問題に取りくんだ。得られた結論は以下のとおりである。

「発見のタ」は、その意味的特徴から、[+状态的]な述語を要求する。ところで、可能文の派生方法には2種類ある。まず、ヲ可能は助動詞-(*rar*)*eru*の選択特性を満たすように構造が作られる。-(*rar*)*eru*は状態性の素性を持たないので、共起する動詞の素性が浸透する。大抵の動詞は[-状态的]であるので、大抵のヲ可能は[-状态的]となる。一方、ガ可能はガ格目的語と可能動詞句が*aboutness*により結びつく。*aboutness* 述語は[+状态的]でないならないから、可能述語句は何らかの操作により[+状态的]になる。ゆえに、「発見のタ」と共起できるのはガ可能のみ、ということになる。

可能を表す命題に「発見のタ」が付いた時の意味解釈は次のとおりである。「発見」とは、ある事態が実現したのを見て、その事態の実現可能性の存在に気づくことである。ゆえに、この可能文は必ず実現の含意を持つ。

「可能+発見のタ」の分布範囲を調べていくなかで、「発見のタ」は従来考えられてきたよりも広い分布をしていることも分かった。過去命題の表す事柄が観察行為の結果分かったことであれば、その過去命題に付く「タ」は「過去のタ」ではなく「発見のタ」である。つまり、従来言われてきたように、「発見のタ」は発話時現在の発見を述べるのみならず、過去の発見を述べる際にも現れるのである。このような文脈（やってみたら…できた）で使われる可能文ではガ格標示が義務的である。このことから、「発見のタ」の使用はオプションではなく、しかるべき文脈では義務的に生じると考えられる。

参考文献

- 青木ひろみ (2008)「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」. 『世界の英語教育』 18: 133-146.
- Chomsky, Noam (1977) On *wh*-movement. In: Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Coates, Jennifer (1983) *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harada, Naomi (2002) *Licensing PF-visible formal features: A linear algorithm and Case-related phenomena in PF*. Doctoral dissertation. University of California, Irvine.
- 長谷川信子 (1999)『生成日本語学入門』. 東京: 大修館.
- Hiraiwa, Ken (2007) Indeterminate-agreement: Some consequences for the Case system. *MITWPL* 50: 93-128.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上和子 (1976)『変形文法と日本語 (上)』. 東京: 大修館.
- 井上優 (2001)「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」. つくば言語文化フォーラム (編)『「た」の言語学』, 97-163. 東京: ひつじ書房.
- 入江雅子 (1991)「現代日本語の可能文におけるガ格とヲ格」. 『言語・文化研究』 9: 45-53. 東京外国語大学.
- 加藤重広 (2009)「タ形の長期記憶参照標識機能」. 『北海道大学文学研究科紀要』127: 1-27. 北海道大学.
- Kishimoto, Hideki (2001) Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597-633.
- 工藤真由美 (2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」. 『言語』 12月号: 40-47.
- 国広哲弥 (1967)『構造的意味論—日英両語対照研究—』. 東京: 三省堂.

- 久野暉 (1973)『日本文法研究』. 東京:大修館.
- Kuno, Susumu (1976) Subject raising. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, 17-49. New York: Academic Press.
- Kuroda, S.-Y. (1965 [1979]) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation. MIT. [Published from New York: Garland, 1979.]
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.
- 町田健 (1989)『日本語の時制とアスペクト』. 東京:アルク.
- 牧野成一 (1978)『ことばと空間』. 東京:東海大学出版会.
- 牧野成一 (1996)『ウチとソトの言語学—文法を文化で切る—』. 東京:アルク.
- 益岡隆志 (2000)『日本語文法の諸相』. 東京:くろしお出版.
- 三原健一 (1994)『日本語の統語構造』. 東京:松柏社.
- 三原健一・平岩健 (2006)『新日本語の統語構造』. 東京:松柏社.
- 三上章 (1953 [1972])『現代語法序説—シンタクスの試み』. 東京:刀江書院.
[東京:くろしお出版から復刻, 1972.]
- 森田良行 (2002)『日本語文法の発想』. 東京:ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007)『現代日本語文法 3』. 東京:くろしお出版.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, 281-338. Dordrecht: Kluwer.
- 定延利之 (2004)「ムードの「た」の過去性」. 『国際文化学研究』 21: 1-68. 神戸大学国際文化学部.
- 佐々木淳 (2009)「思考動詞「思う」における埋め込み主語の主格・対格交替について」. Ms. 比治山大学.
- 澤田治美 (1993)『視点と主観性—日英語動詞の分析—』. 東京:ひつじ書房.
- Shibatani, Masayoshi (1976) Causativization. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, 239-294. New York: Academic Press.
- 柴谷方良 (1978)『日本語の分析』. 東京:大修館.
- 渋谷勝己 (1993)「日本語可能表現の諸相と発展」. 『大阪大学文学部紀要』 33 (1). 大阪大学.
- Swan, Michael (1995) *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Tada, Hiroaki (1992) Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14:

91-108.

- Takahashi, Hideya (2007) Predicate movement and multiple subject constructions in Japanese. *Liberal Arts* 1: 21-41. Iwate Prefectural University.
- 高橋太郎 (1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所報告 82). 東京: 秀英出版.
- 鷹家秀史・林龍次郎(2004)『詳説 レクシス プラネットボード』. 東京: 旺文社.
- Takano, Yuji (2003) Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 779-834.
- Takezawa, Koichi (1987) *A configurational approach to Case-marking in Japanese*. Doctoral dissertation. University of Washington.
- 竹沢幸一・John Whitman (1998)『格と語順と統語構造』. 東京: 研究社出版.
- Taylor, Barry (1977) Tense and continuity. *Linguistics and Philosophy* 1: 199-220.
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』. 東京: くろしお出版.
- Vlach, Frank (1981) The semantics of the progressive. In: Philip J. Tedeschi and Annie Zaenen (eds.) *Syntax and semantics 14: Tense and aspect*, 271-292. New York: Academic Press.